

昨年の初秋、新しい仕事が決まりかけていた頃、テレビやその他の宣伝媒体で、北野武演ずる男がこの言葉をキャッチフレーズに新車の宣伝をしていた。「変わる」のではなく「変わる」といっているのが、当時の自分の気分に適していた。基礎科学の研究と教育を中心とした30年以上の生活から「変わらされる」というのが実状に近いのだが、ともかくも今までと違う仕事をするのだという意気込みとは言えないまでも、「まだ」変わるという気持ちを鼓舞させる言葉として、この言葉をつぶやいてきた。この4月に就任した新しい仕事は、大学評価事業に伴う各種の委員会の調整役に加えて、「個々の分野に即した評価システムのあり方について調査研究」を行い、「分野別の教育・研究評価システムを研究・企画する」と公募文では記されている。研究や大学教育の評価を研究することになるのである。正直言って、実際に採用されるまで、教育評価はともかくも、研究評価が研究対象になっているとは知らなかった。これまでの研究生活の中で、研究を評価するという作業は多くの場面でやってきた。分子研の人事委員は、延べ8年間も務めさせられたが、分子研のような研究機関では、人事選考が研究（能力）評価作業と言ってよいだろう。学術雑誌の論文審査や科学研究費の審査も研究評価の一つであろう。しかし、今問題になっているのは、大学や学部・研究科、学科・専攻という組織の評価である。個々の研究の善し悪しは私たちが日頃いろいろな形で判断しているが、組織の評価となると機会も少ない。研究評価という場合、あくまでも一つ一つの研究評価の積み重ねがなければならないが、組織の研究評価になると観点を増やさなければならないであろう。この組織の研究評価をこの十数年間徹底して実施しているのがイギリスである。研究評価作業（Research Assessment Exercise, RAE）は研究分野（Unit of Assessment, UoA）を69設定して、すべての高等教育機関を対象にして一斉に実施している。前回は1996年に実施された。RAE2001が今進行中で、各機関の書類提出が終わり、69個のパネルが評価作業を開始したところである。^{*} 私が所属しはじめた大学評価・学位授与機構が文部科学省の要請で試行を開始した大学評価事業の中の「分野別研究評価」^{***}がRAEに対応しているが、根本のところは異なっている。RAEでは、各パネルが各機関を7段階に等級付けし、その結果が次の何年間の研究費算定に用いられる。そもそもが、高等教育資金会議（Higher Education Funding Council for England, HEFCE）がRAEを実施している。昨年度から開始された日本の事業は、直接的には財政と結びつかず、「競争的環境の中で個性が輝く大学」、「各大学等の教育研究活動等の改善」が第1に掲げられている。他にも多くの相違点があるが、もう一つあげると、RAEの評価の基準が、徹底して研究の質（quality of research）が問うているのに対して、「分野別研究評価」では、個々の研究の評価に際して「社会的貢献」という項目が付け加わっている。大学評価事業は、「開放的に進化するシステム」を唱っている。厳しい批判の目が今後とも必要であろう。

研究評価が特に話題になってきたのは、いわゆる「競争的基金」に大学等の個人あるいはグループが応募し獲得するようになったこととも関係していよう。これらの研究費の執行に際して、中間評価や事後評価が行われるのが普通になってきてまだ十数年もたっていない。この時の「評価」の判断はどのように行われているのか、あるいは行うのが適切なのか？ 私自身の例でも、科学技術振興事業団の資金による研究では、担当事務官から盛んに「特許」の取得を促された経験を持っている。研究をまだしているつもりが「評価の研究」を勉強する価値があるのだと思いきもしている今日この頃である。

研究資金を得るための申請書を書き上げるには、かなり明確な研究成果を心に描かなければならない。研究報告でも筋書きがあったかのような「お話」をすることになる。ところが、多くの新しい独創的な研究は予定外のところから出発するし、実際の研究の進行は、後付のお話とはかけ離れたジグザグな紆余曲折を経ている。Serendipityと言う言葉が、白川先生のノーベル賞受賞を契機に思い出されているが、研究が一段落したときに書いたり話したりする総合報告は、研究の位置づけには有効であろうが、その美辞麗句では、次の飛躍には結びつかない。一つの研究プロジェクトの評価を近視眼的に下すことは避けなければならないだろう。

* 平成13年4月から大学評価・学位授与機構 評価研究部 教育・研究評価開発部門に就任

** RAEやHEFCEについては、もっと「調査研究」して、別の機会に昔の研究者仲間に報告しましょう。

*** 「全学テーマ別」、「分野別教育」、「分野別研究」に分かれて評価事業が進められている。